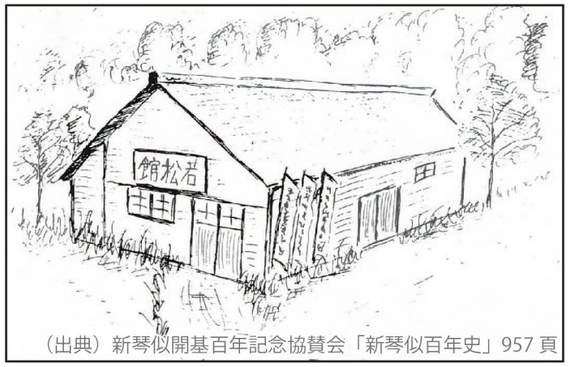
新琴似歌舞伎のれきし

明治30年（1897年）、新琴似の青年たちが神社で演じた歌舞伎が始まりです。開拓のたいへんな作業の日々の中、楽しさをもとめる気持ちが強くなっていたので、人気となりました。当時としてはめずらしい、いつでも歌舞伎を見られる『若松館』がたてられ、同じ時代の篠路歌舞伎とならんで、きちょうな北区の文化となりました。

劇場まででできたってことは、スゴイ人気だったんだな

▶田中松次郎



▶「若松館」中村栄蔵画

（出典）新琴似開基百年記念協賛会「新琴似百年史」957頁

当時は寄付を『花』って言ってたのか・・粋じゃねーか！

新琴似歌舞伎は、鳥取県から農民としてやってきた田中松次郎（座長）や、山本長三郎、原銀四郎、村田勇、八田常作、住友昇、内川八百人などが中心となって、新琴似神社で公演を行い大人気となりました。無料で見ることができ、『花』とよばれた寄付でなり立っていました。

若松館は、田中松次郎の歌舞伎を新琴似の人に見せたいという強い思いからたてられました。特設の舞台や花道、見物席、楽屋、警察官席、トイレなどがあり、310人のお客さんが入りました。それは、村の人の半分が見られるほどの大きさでした。

▲当時の歌舞伎衣装

▲当時の歌舞伎の台本

多い時には50人近くの役者がいましたが、映画館や劇場などが札幌市の中心部に次々とでき、若者が少しずつ歌舞伎からはなれていきました。そして、大正5年（1916年）を最後に新琴似歌舞伎は演じられなくなりました。

歌舞伎豆ちしき

「白浪五人男」ってどんなお話？

日本駄衛門（リーダー）、弁天小僧菊之輔、忠信利平、赤星十三郎、南郷力丸の5人の盗賊が主人公です。

悪事の計画がばれた盗賊団『白浪五人男』は、稲瀬川の土手まで捕手（今で言う警察）に追いつめられますが、それにも動ぜず5人は一人ひとりどうどうと名乗りをあげます。

桜が咲き乱れる中、『志ら浪』と書かれた傘を持ってならぶ美しさやセリフの名調子などは、まさに歌舞伎の真骨頂です。

おいら実は日本駄衛門をもとに生まれたんだ。カッコいい男だけど盗賊はかっこ悪いな。